

職業行動に関する研究 — 進路発達に関する幾つかの問題 —

A Study of Vocational Behavior — some problems on career development —

森 下 高 治

高等学校卒業者の進路動向について、1986年(昭和61年度)の実態をみると、男子では80.3万人のうち、大学へ進学したものは24.7%(19.8万人)、短期大学1.5%(1.2万人)、専修・各種学校30.2%(24.2万人)、就職37.0%(29.7万人)、公共職業訓練施設等1.0%(0.8万人)と大別される。

一方、女子は81.7万人のうち、大学が11.4%(9.3万人)、短期大学22.4%(18.3万人)、専修・各種学校20.1%(16.4万人)、就職39.8%(32.5万人)、公共職業訓練施設等0.2%(0.2万人)という数字である。

また、森下(1987)によると、1983年～1985年の年次別比較においても、ここ4～5年の進路動向の推移は、大学・短大進学者が約30%、専修・各種学校をも含む教育訓練機関25%、就職者40%、無業者・その他5%となっている。

これをもう少し詳細にみると、男子で大学が25.5%、短期大学1.4%、専修・各種学校28.4%、就職38.0%、女子で大学が11.3%、短期大学21.3%、専修・各種学校19.9%、就職41.9%という実態である。

そこで、高等学校の前段階の中学校について、高校への進学が94%となっている今日、逆に高等学校での進路の選択・決定が人生にとって第1の関門として位置づけられる。

青年期のこの時期について、多くの識者らによって、例えば、ブロス(1962)は、高校生の進路決定が人格的発達の側面を持つため極めて重要な時期とし、発達課題の重要課題としている。既に、高校生を対象とした研究は、筆者が1984、1985及び1986年に取り上げているが、本研究は前論文をより深く分析することにより、以下に掲げる青年の職業行動の諸問題を明らかにする。

1. 高校1年生の進路発達状況について、彼らがどのような発達状況にあるのか、すなわち、進路成熟及び進路に関する自己確立がどの程度はかられているかである。これに関連した直接的な問題はまず具体的な卒業後の進路、将来の職業をどういっているかである。
2. 次に、進路成熟について、いかなる要因がかかわっているか、進路成熟の背景を明らかにする。
3. さらに、進路が明確に定まっているものが、職業に対する活動性、能力、興味などの職業志向性でどのような結果を示すか、これを定まっていまいとされる不明確群と比較検討する。

方 法

調査対象 大阪府内の衛生都市にある府立A高等学校及び大阪市内の市立B高等学校、各1校、京都府内衛星都市にある府立C高等学校1校の計3校を対象とする。いずれも普通科で1年生男子633名、女子667名の計1300名である。学校別人数は、Table 1の通りである。

Table 1 男女学校別調査対象 (人数)

	男子	女子	計
大阪府立A校	226*	276	502
大阪市立B校	214	203	417
京都府立C校	193	188	381
計	633	667	1300

* 数量化I類処理によるデータは232名

調査方法及び期日 進路に関する調査—今回は、実務教育出版 CDT-3にある進路成熟度尺度¹⁾と Holland, J. L.ら(1980)によって作成された My Vocational Situation²⁾を邦訳したものを含む—と日本文 SDS 職業適性自己診断テスト³⁾を1986年10月、11月に実施した。

1) 進路成熟尺度は、下位尺度が自発性、独立性、計画性の3尺度からなり、各尺度10項目で、20～0点の得点範囲にある。また、それらを合計した値が60～0点で、個人の進路成熟度として表される。

2) My Vocational Situation は、職業に関する状況尺度として用いたが、自己確立18項目、職業情報及び実現への障害、各4項目の計26項目である。

得点は、自己確立が18～0点、残りの尺度は、4～0点で得点が高いほど状況がよく自己確立が上で、職業情報の必要性なし、実現への障害なしというように意識が高く、問題が少ないとみられる。

職業に関する状況尺度の信頼性

大学生女子(18.6才)に1987年6月3日と同7月10日に調査を実施し、再検査法にて信頼性を求めた。Table 2 からして、職業情報はやや低い、信頼性ありと判断される。

Table 2 再検査法による信頼性結果 (N = 54)

	r
自己確立 (Vocational Identity)	・ 804
職業情報 (Occupational Information)	・ 496
実現への障害 (Barriers)	・ 633

3) 日本文 SDS 職業適性自己診断テストは、Holland, J. L. (1970, 1977)の日本版であ

る。質問は仕事に関する活動性、能力、具体的職業名による職業興味、能力の自己評価2種の計5つの側面からなる。

結果は、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的及び慣習的のいずれのパーソナリティ・タイプが強いかをみだせる職業志向性を測定するテストである。

結 果 と 考 察

I 1年生2学期時点の実態

卒業後の進路及び上級校への専門の方向性

まず、卒業後の男女学校別の進路希望と過去2～3年の当該校の卒業生の実態から分析を進める。

実態については、当該校の社会的地位状況が考えられ、過去の進路実績が中学校から高校へ進学する時に生徒の進路動向意識に影響があると予想される。

Table 3、4に結果を示すが、男子のA校について、大学への進学希望が59.3%に対して、実績は大学が22.3%、浪人が42.7%であり、計65.0%となっている。

B校でも大学への希望が57.5%に対して、実績は、大学と浪人あわせて64.6%である。

また、C校は大学への進学希望が70%を超えているが、大学と浪人の実績は59.2%となっている。

3校のなかでC校は1番未定者が少ないが、逆に、実績では専門学校*が23.7%で最も高い。表から過去の実績で判断すると、実際の進路では大学への進学希望者が、一部専門学校に流れるものと思われる。

以上から、彼らの進路は学年が進行するに従い、未定者が大学への進学志望から就職への志望にいたるいずれかに振り分けられるが、最終的には、専門学校、就職への進路が増加する傾向にある。

一方、女子はA校が大学への進学希望が19.2%、短期大学が35.5%であるのに対して、実績は大学が7.7%、短期大学が40.5%で、実際の進路では短期大学、専門学校へと進路が移行する傾向にある。また、B校でも大学希望者が16.3%、短期大学が28.1%に対して、実績では短期大学が45.2%と、一部未定者からの参入をも含め3校のなかで最も高い。さらに、C校では大学希望者が18.6%、短期大学が25.5%であるのに対して、実績では大学が12.2%、短期大学32.6%である。

以上から、大学進学者は3校とも実績では減少し、逆に短期大学への進学は増加する。就職は、A、B両校ともに実績では大幅に増加する。また、未定者については、その一部が就職、専門学校へ進路を振り分けるものと思われる。

* 専門学校は、専修学校及び各種学校をさす。

Table 3 志望状況と進路実績動向 (男子)

(%)

	志 望 状 況				実 績*			
	A	B	C	計	A	B	C	計
大 学	59.3	57.5	72.5	62.7	22.3	28.9	16.0	22.4
短期大学	—	—	—	—	2.7	1.4	2.1	2.1
専門学校	8.4	4.2	6.7	6.5	17.4	16.6	23.7	19.2
就職・進学	1.3	2.3	0.5	1.4	0.4	—	0.2	0.2
就 職	6.6	5.6	6.2	6.2	11.3	14.7	12.0	12.7
家 庭	—	—	—	—	—	—	—	—
未 定	19.9	27.6	14.0	20.7	—	—	—	—
そ の 他	3.5	1.9	—	1.9	3.5	3.0	2.8	3.1
浪 人	—	—	—	—	42.7	35.7	43.2	40.5

Table 4 志望状況と進路実績動向 (女子)

(%)

	志 望 状 況				実 績*			
	A	B	C	計	A	B	C	計
大 学	19.2	16.3	18.6	18.1	7.7	10.5	12.2	10.1
短期大学	35.5	28.1	25.5	30.4	40.1	45.2	32.6	39.3
専門学校	13.8	12.8	14.4	13.6	21.9	11.8	17.5	17.1
就職・進学	0.4	1.5	1.1	0.9	1.1	—	—	0.4
就 職	7.2	6.9	18.1	10.2	21.6	25.2	25.9	24.2
家 庭	0.4	—	—	0.1	—	—	—	—
未 定	21.0	32.5	20.2	24.3	—	—	—	—
そ の 他	1.4	2.0	2.1	1.8	4.8	2.5	3.0	3.4
浪 人	—	—	—	—	3.9	4.1	8.7	5.6

* 進路実績は A、C 校が 1984 年～1986 年の 3 年間、B 校は 1985 年、1986 年の 2 年間の実績を表す。

次に、全体からみると、男子は将来の進路を決めていないが 20.7%、女子が 24.3% で約 1/5 程度が明確でない回答をよせている。

逆に、大学への進学希望が男子で 62.7%、女子は 10.1% で、専門学校をも含む学校名や専門の具体的方向性を決めているとするものは、男女とも 17% が明確または大体きめているとしている。

志望職業 Table 5 からして、男子の志望職業がある(明確にきめている、大体きめている)とするのは、633 名中 167 名で 26.4%、女子は 667 名中 217 名、32.5% でカイ 2 乗検定でわずかではあるが女子の方が多い。

志望職業の主だったものを Table 6 に示すと、男子が技師、公務員が多く、女子は保母・幼稚園教諭、看護婦が多い。

Table 5 志望職業の回答 (%)

	決めている	決めていない	未記入他
男子	26.4	66.0	7.6
女子	32.5	60.3	7.2
全体	29.5	63.1	7.4

df = 2 $\chi^2 = 5.85$ $.10 < p < .05$

Table 6 志望職業の主な分野

男子	技 師	公 務 員	営業・販売	整 備 士	車掌・運転手	芸 術 系	教員・事務
人数	23	20	12	10	8	8	各6
女子	保母・幼稚園	看 護 婦	事 務	美 容 師	教 員	公 務 員	販売・営業
人数	30	23	16	12	10	8	7

職業選択決定状況 Appendix に掲載の通り、職業選択決定状況として、下山(1983)の分類を参考に、a～jの計10の回答を用意した。そのうち、a～hの各状況は、a 達成の状況、b 早期完了、C 希望、d 防衛、e 模索、f 猶予、g 混乱、h 無関心である。

そこで、a、b、cをまとめて既決状況、dは中間、e、f、gは上記の状況どおり、最後hは楽観として、Table7のように整理した。

表から男女により、職業選択決定状況に違いがあるかをカイ2乗検定で試みた。結果は1%水準で男女差を認めることができたが、これを数値から詳しくみると、既決、中間の決めている状況にあるのは、男女とも殆んど変わらない結果を示している。しかし、目立っているのは、混乱の未決積極型にある状況は女子に多く、逆に、猶予の未決消極型は男子に多いのが特徴的であると言える。従って、女子の方が男子より、選択に対する決定状況はやや早い状況にある。

Table 7 選択決定状況について

	既 決	中 間	模 索	混 乱	猶 予	楽 観	計
男子	194	76	95	137	98	15	615
女子	218	76	90	191	68	6	649

$X^2 = 18.71$ $p < .01$

進路成熟度 ここでは、実務教育 CDT-3の進路成熟度を取り上げ結果をみる。本尺度は、生徒の進路成熟がどの程度かをみようとするもので、今回の男子データの総合点の平均値は34.26(7.28)*、女子が34.61(7.52)であった。これを高校1年生段階の標準化資料と比

* ()は、標準偏差を表す。

較すると、男子の標準化データは 34.62 (7.66)、女子は 35.31 (7.07) で、本データと殆んど同じで、対象は平均的なデータとみられる。

II 進路成熟尺度を軸とした高得点者群と低得点者群の職業意識の反応パターン

進路成熟度の違いについて、いずれの職業意識の側面が強いのか、言い換えるならば、いずれの要因が進路成熟にかかわっているかを明らかにするために、数量化II類による検討を試みた。

説明変数として、進路に関する調査のなかの進路の具体性から志望職業の明確性の4項目に、職業に関する状況尺度の職業に対する自己確立の18項目を加え、計22項目とした。

一方、外的基準である進路成熟度は総合点を用い、平均値から1.57SDでもって上位、下位群(5.8%)にあるものを抽出した。男子では各36名、女子では各39名である。

男子の結果 Table 8 に結果を示す。判別の精度を表す相関比は、 $\eta^2 = 0.939$ でサンプル・スコアの平均値は高得点者群 = -0.0116、低得点者群 = 0.2097 である。

これをまず、判別に寄与する要因の程度がレンジによって示されるのでそれからみると、④の職業の選択決定状況、自己確立スケールの2興味・関心事の変化、4自分の長所・短所の把握と理解、7自分のやるべき仕事・職業への追求と努力の数値が大きい。

また、表に記されていないが、偏相関係数では②の志望学校・専門の方向性(0.424)、④の決定状況(0.596)、自己確立スケールの2興味・関心事(0.552)、7自分のやるべき仕事・職業への追求と努力(0.525)、11職業に対する理解(0.405)、14志望職業の範囲(0.401)が高い。従って、成熟している生徒らは、専門の方向性や職業の選択決定状況が明確であり、興味・関心が不変、職業に対する理解が十分なこと、また、自分自身の志望職業も定まっているに特徴がある。

女子の結果 Table 9 に結果を示す。判別の精度を表す相関比は、 $\eta^2 = 0.955$ で極めて高い。また、サンプル・スコアの平均値は高得点者群 = 0.0137、低得点者群 = 0.2300 である。男子と同様、まずレンジでみると、④の職業の選択決定状況、自己確立スケールの2興味・関心事の変化、4長所・短所の把握と理解、8職業観の確立、9決定についての混乱、13やりがいのある仕事・職業、14志望職業の範囲等の数値が大きい。

一方、偏相関は④の決定状況(0.597)、自己確立の2興味・関心事の変化(0.512)、4長所・短所の把握と理解(0.712)、8職業観の確立(0.570)、14志望職業の範囲(0.529)、15能力の変化(0.607)が高い。これから、女子は男子と大枠では変わらないが、さらに加えて、長所・短所の十分な理解、能力の不変、職業観の確立、やりがいのある仕事・職業の発見及び志望職業が絞られているところに成熟度が高い高得点者群の特徴がみられる。

Table 8 数量化II類による進路成熟の分析結果 (男子)

項 目	カテゴリー	反応サンプル数			カテゴリー・ ウエイト	レ ン ジ
		H群	L群	計		
① 卒業後の進路	1 大学	20	16	36	. 0077	. 0796
	2 専門学校	7	0	7	-. 0351	
	3 就職	3	3	6	-. 0642	
	4 未定	6	17	23	. 0154	
② 専門の方向性	1 決めている	15	3	18	-. 0277	. 0590
	2 漠然と	10	16	26	. 0313	
	3 未記入	11	17	28	-. 0113	
③ 志望職業	1 決めている	24	5	29	. 0330	. 0579
	2 漠然と	10	30	40	-. 0249	
	3 未記入	2	1	3	. 0132	
④ 決定状況	1 既決	26	1	27	-. 0695	. 1269
	2 防衛	3	6	9	. 0164	
	3 模索・混乱	6	18	24	. 0434	
	4 猶予・無関心	1	11	12	. 0574	
自己確立スケール 1 進路の確認	1 不要	8	13	21	. 0139	. 0572
	2 必要	23	16	39	-. 0192	
	3 未記入	5	7	12	. 0380	
2 興味の変化	1 不変	32	10	42	-. 0279	. 1564
	2 変わる	3	25	28	. 0495	
	3 未記入	1	1	2	-. 1069	
3 仕事への自信	1 あり	14	4	18	-. 0109	. 0348
	2 なし	21	29	50	. 0020	
	3 未記入	1	3	4	. 0239	
4 長所・短所	1 知っている	28	9	37	-. 0131	. 1489
	2 知らない	8	26	34	. 0103	
	3 未記入	0	1	1	. 1358	
5 見通し	1 あり	20	4	24	-. 0125	. 0301
	2 なし	14	26	40	-. 0112	
	3 未記入	2	6	8	-. 0189	
6 決定への自信	1 あり	25	2	27	-. 0344	. 0604
	2 なし	10	32	42	. 0202	
	3 未記入	1	2	3	. 0260	
7 努 力	1 必要なし	9	3	12	. 0457	. 3127
	2 " あり	26	33	59	-. 0048	
	3 未記入	1	0	1	-. 2670	
8 職業観	1 必要なし	15	3	18	. 0395	. 0533
	2 " あり	20	31	51	-. 0138	
	3 未記入	1	2	3	-. 0253	
9 決定への混乱	1 なし	17	12	29	. 0176	. 0428
	2 あり	18	23	41	-. 0112	
	3 未記入	1	1	2	-. 0252	
10 進路の確認	1 確認不要	23	6	29	-. 0207	. 0483
	2 " 必要	12	20	32	. 0092	
	3 未記入	1	10	11	. 0277	
11 職業に対する理解	1 十分	20	8	28	-. 0265	. 0894
	2 不十分	13	25	38	. 0096	
	3 未記入	3	3	6	. 0628	

職業行動に関する研究

12 特定の職業	1 一つ	13	3	16	.0153	.0522
	2 二つ以上	23	28	51	-.0090	
	3 未記入	0	5	5	.0431	
13 やりがい	1 ある	29	7	36	-.0153	.0495
	2 なし	6	26	32	-.0208	
	3 未記入	1	3	4	-.0287	
14 志望職業の範囲	1 必要なし	14	4	18	-.0432	.0622
	2 考えてみる	22	28	50	.0190	
	3 未記入	0	4	4	-.0426	
15 能力の変化	1 不変	19	9	28	.0024	.0577
	2 変わる	17	23	50	-.0068	
	3 未記入	0	4	4	.0509	
16 生き方	1 わかる	11	1	12	.0302	.0363
	2 わからない	25	35	60	-.0060	
17 仕事に対する継続	1 見当がつく	25	7	32	.0153	.0296
	2 つかない	11	26	37	-.0143	
	3 未記入	0	3	3	.0128	
18 実現への方法	1 わかる	19	2	21	-.0180	.0260
	2 わからない	16	32	48	.0081	
	3 未記入	1	2	3	-.0036	

$\eta^2 = .9390$ 外的基準変数：進路成熟尺度得点
M 34.26
SD 7.28

高得点群 (N = 36) = -.0116
低得点群 (N = 36) = .2097

Table 9 数量化II類による進路成熟の分析結果 (女子)

項 目	カテゴリー	反応サンプル数			カテゴリー・ ウエイト	レ ン ジ
		H群	L群	計		
① 卒業後の進路	1 大学	21	17	38	-.0169	.0629
	2 専門学校	11	2	13	-.0125	
	3 就職	6	2	8	-.0088	
	4 未定	1	18	19	.0460	
② 専門の方向性	1 決めている	23	3	26	-.0244	.0454
	2 漠然と	10	17	27	.0041	
	3 未記入	6	19	25	.0210	
③ 志望職業	1 決めている	30	4	34	.0000	.0795
	2 漠然と	9	33	42	-.0036	
	3 未記入	0	2	2	.0758	
④ 決定状況	1 既決	34	3	37	-.0406	.1029
	2 防衛	1	3	4	.0624	
	3 模索・混乱	3	21	24	.0466	
	4 猶予・無関心	1	12	13	.0102	
自己確立スケール 1 進路の確認	1 不要	6	11	17	-.0064	.0352
	2 必要	29	18	47	-.0063	
	3 未記入	4	10	14	.0288	
2 興味の変化	1 不変	34	7	41	-.0206	.1064
	2 変わる	4	29	33	.0344	
	3 未記入	1	3	4	-.0721	
3 仕事への自信	1 あり	12	2	14	-.0200	.0300
	2 なし	24	31	55	.0035	

職業行動に関する研究

	3 未記入	3	6	9	. 0099	
4 長所・短所	1 知っている	27	11	38	-. 0071	. 3600
	2 知らない	11	28	39	. 0158	
	3 未記入	1	0	1	-. 3442	
5 見通し	1 あり	19	13	32	. 0170	. 0334
	2 なし	15	14	29	-. 0092	
	3 未記入	5	12	17	-. 0164	
6 決定への自信	1 あり	31	6	37	-. 0085	. 0346
	2 なし	6	29	35	. 0045	
	3 未記入	2	4	6	. 0261	
7 努力	1 必要なし	10	3	13	. 0214	. 0276
	2 〃 あり	27	32	59	-. 0062	
	3 未記入	2	4	6	. 0149	
8 職業観	1 必要なし	15	2	17	-. 0020	. 1078
	2 〃 あり	22	29	51	-. 0171	
	3 未記入	2	8	10	. 0907	
9 決定への混乱	1 なし	29	16	45	. 0050	. 1166
	2 あり	10	20	30	. 0037	
	3 未記入	0	3	3	-. 1116	
10 進路の確認	1 確認不要	23	4	27	-. 0191	. 0406
	2 〃 必要	13	18	31	. 0028	
	3 未記入	3	17	20	. 0215	
11 職業に対する理解	1 十分	17	5	22	. 0173	. 0495
	2 不十分	15	29	44	-. 0174	
	3 未記入	7	5	12	. 0321	
12 特定の職業	1 一つ	15	8	23	. 0054	. 0411
	2 二つ以上	23	24	47	-. 0082	
	3 未記入	1	7	8	. 0329	
13 やりがい	1 ある	28	9	37	. 0188	. 1114
	2 なし	6	28	34	-. 0014	
	3 未記入	5	2	7	-. 0926	
14 志望職業の範囲	1 必要なし	15	3	18	. 0274	. 1138
	2 考えてみる	20	33	53	. 0021	
	3 未記入	4	3	7	-. 0864	
15 能力の変化	1 不変	23	9	32	-. 0408	. 0749
	2 変わる	12	23	35	. 0341	
	3 未記入	4	7	11	. 0104	
16 生き方	1 わかる	18	2	20	. 0293	. 0848
	2 わからない	17	35	52	-. 0189	
	3 未記入	4	2	6	. 0659	
17 仕事に対する継続	1 見当がつく	25	5	30	-. 0388	. 0657
	2 つかない	11	31	42	. 0269	
	3 未記入	3	3	6	. 0055	
18 実現への方法	1 わかる	18	3	21	-. 0180	. 0419
	2 わからない	19	32	51	. 0111	
	3 未記入	2	4	6	-. 0308	

$\eta^2 = . 9554$

外的基準変数：進路成熟尺度得点

M 34. 61

S D 7. 52

高得点群 (N = 39) = . 0137

低得点群 (N = 39) = . 2300

Table 10 数量化I類による進路成熟の分析結果(男子)

項 目	カテゴリー	反応数	カテゴリー・ウェイト	レ ン ジ
① 卒業後の進路	1 大学	140	1. 8953	6. 1297
	2 専門学校	20	. 8835	
	3 就職	23	-3. 2834	
	4 未定	49	-4. 2344	
② 専門の方向性	1 決めている	43	- . 0685	4. 6001
	2 漠然と	123	-1. 5908	
	3 未記入	66	3. 0093	
③ 志望職業	1 決めている	59	1. 7118	4. 3651
	2 漠然と	163	- . 8361	
	3 未記入	10	3. 5289	
④ 決定状況	1 既決	72	1. 1689	2. 8321
	2 防衛	27	- . 2001	
	3 模索・混乱	93	- . 1315	
	4 猶予・無関心	40	-1. 6632	
自己確立スケール 1 進路の確認	1 不要	148	. 0851	0. 3949
	2 必要	49	- . 0358	
	3 未記入	35	- . 3098	
2 興味の変化	1 不要	94	-1. 2725	2. 9440
	2 変わる	125	. 7831	
	3 未記入	13	1. 6715	
4 長所、短所	1 知っている	111	-1. 6459	3. 6514
	2 知らない	116	1. 4885	
	3 未記入	5	2. 0055	
6 決定への自信	1 あり	152	-1. 2059	4. 7076
	2 なし	64	1. 9886	
	3 未記入	16	3. 5017	
7 努 力	1 必要なし	187	. 3797	2. 2888
	2 〃 あり	31	-1. 9091	
	3 未記入	14	- . 8447	
8 職業観	1 必要なし	188	. 0647	5. 0068
	2 〃 あり	29	1. 4303	
	3 未記入	15	-3. 5766	
11 職業に対する理解	1 十分	124	. 5989	1. 7427
	2 不十分	81	- . 5355	
	3 未記入	27	-1. 1438	
14 志望職業の範囲	1 必要なし	171	. 1420	. 8353
	2 考えてみる	45	- . 2932	
	3 未記入	16	- . 6933	
15 能力の変化	1 不変	124	- . 4515	1. 2195
	2 変わる	85	. 7680	
	3 未記入	23	- . 4040	

外的基準変数：進路成熟尺度得点

N = 232 M 34.72

SD 7.38

次に、数量化II類では進路成熟尺度の高得点者と低得点者を抽出したが、ここでは進路成

熟尺度得点を定量的変数の外的基準と定め、I類による処理を試みた。

対象は、男子A校232名でTable 10に結果を示す。

説明変数として、前述のII類の結果を踏まえ、13変数(ITEM)を用いた。各変数のレンジ及び偏相関係数から、①の卒業後の進路、②の志望校及び専門の方向性、③志望職業の明確性、④の決定状況、自己確立スケールの2興味・関心事の変化、4長所・短所の把握と理解、6決定への自信、8職業観の確立が進路成熟に関わる重要な変数であることが明らかになった。

結局、進路成熟にかかわる要因は、男女にやや違いはあるが、職業の選択決定状況が明確で、興味・関心事が不変である。志望職業が絞られ定まっている、職業に対する理解が十分である、また、自己の長所・短所の十分な理解がはかられていること及び職業観の確立などが、強い影響力をもつものと思われる。

III 進路明確群と不明確群の進路意識と職業志向性

ここでは進路意識が明確なものと不明確なものが、果たしてSDSで測定される職業志向性に差異があるかを検討しようとする。すなわち、明確群は、職業志向性においても特徴がよりはっきりしていると期待される。

本分析での進路明確群とは、志望校及び専門の方向性が明確、志望職業も明確、職業選択の決定状況も既決である生徒を言う。男子45名、女子57名の対象である。逆に、不明確群は将来の進路が未定、志望職業もばくぜんとしているか、未定である、職業選択の決定状況も混乱の状況にあるものをさす。男子42名、女子72名の対象である。

そこで、まず進路明確群の男子の志望職業について、技術系職業群のSDS総合コード結果は、15名のうち第1位に現実的(R)タイプを示すものが11名、研究的(I)が2名と圧倒的に現実的タイプが多い。デザイナー、音楽・美術教員、ディレクターなどの芸術系は、7名のうち芸術的(A)タイプが5名を数えている。

一方、女子の明確群でも、13名の看護婦志望のうち、第1位に社会的(S)タイプが7名、芸術的(R)が4名、また、7名の保母では、第1位に社会的(S)または芸術的(A)がともに3名ずつである。ピアノ教師は、6名全員が芸術的(A)タイプを第1位としており、明確群のしかも特定の職業を志望しているものは、高等学校1年生段階でも独特で且つ明確なSDS総合コード及びプロフィールを示す。

次に、明確群と不明確群でSDS総合得点結果に違いがあるかをみた結果、Table 11、12から、男子は研究的($p < .10$)、芸術的及び社会的(いずれも、 $p < .05$)の3領域に明確群が有意に高く認められた。これは、上述の明確群の志望職業によるSDS総合コードと関連させると意外と差異が少ない。芸術的及び社会的領域の差異は、教員やデザイナーの具体的志望職業があげられており、これが明確群の得点を高くおしあげられていると思われる。

逆に、現実的、企業的領域は、男子的傾向の強い領域*と考えられるため、不明確群でも高

Table 11 進路明確群と不明確群のSDS及び進路意識に関する結果 (男子)

	進路明確群 N = 45		進路不明確群 N = 42		
	M	SD	M	SD	
SDS総合得点					
現実的	17.66	7.37	19.33	7.44	
研究的	13.40	7.85	10.61	6.04	
芸術的	16.51	8.92	12.69	7.35	*
社会的	16.33	6.27	13.66	5.54	*
企業的	12.66	6.03	12.07	5.15	
慣習的	10.60	5.93	10.69	4.51	
職業の状況尺度					
自己確立	8.95	3.91	3.73	2.26	***
職業情報 実現への障害	1.04	1.08	0.47	0.67	**
	1.44	1.07	0.54	0.70	***
進路成熟尺度					
総合	40.22	6.28	29.95	6.94	***
自発性	12.35	3.05	8.69	3.41	***
独立性	16.28	2.29	14.76	2.90	**
計画性	11.57	4.03	6.54	2.59	***

Table 12 進路明確群と不明確群のSDS及び進路意識に関する結果 (女子)

	進路明確群 N = 57		進路不明確群 N = 72		
	M	SD	M	SD	
SDS総合得点					
現実的	10.59	6.06	8.41	4.61	*
研究的	9.54	5.79	7.58	4.00	*
芸術的	24.14	8.24	18.95	7.24	***
社会的	20.94	6.17	18.23	5.54	*
企業的	13.50	5.70	10.80	5.20	**
慣習的	13.08	5.61	12.56	5.47	
職業の状況尺度					
自己確立	9.01	3.66	3.36	2.16	***
職業情報 実現への障害	1.00	0.99	0.43	0.72	***
	1.77	0.99	0.61	0.72	***
進路成熟尺度					
総合	42.89	6.60	30.30	6.01	***
自発性	12.68	3.42	9.77	3.39	***
独立性	16.47	2.26	14.13	2.69	***
計画性	13.82	3.36	6.22	2.67	***

※ 森下 (1983) によると、男子の特徴として現実的、研究的及び企業的領域が、女子は芸術的、社会的及び慣習的の3領域があげられる。

い得点が得られ違いがみられない。また、同じ特徴を示す研究的領域は、パイロット、X線技師などをデータのなかに拾うことができるが、前述の2領域とちがって弱い、知的・研究的な職業志向性は明確群と不明確群を識別する領域であることがみいだされた。

一方、女子は慣習的領域を除く5領域に差異（現実的、研究的及び社会的は $p < .05$ 、芸術的 $p < .001$ 、企業的 $p < .01$ ）が認められた。これらの結果について、まず女子は、一般的な傾向として慣習的領域に特徴*を示すが、この領域は進路不明確群でも得点が比較的高く、両群間に差異がない。しかし、他の領域については、明確群の具体的志望職業として、看護婦、保母、ピアノ教師、デザイナー、美容師、スチュワーデスなどの芸術的、社会的、研究的及び企業的領域に通じる職業があげられているため、不明確群との間に有意な差異が認められた。

以上、SDSの職業志向性は、領域により明確群と不明確群に違いを認めることができた。全般には、女子により多くの違いがみいだされた。男女とも共通する領域は、社会的、芸術的及び研究的の3領域である。したがって、これがデータの積み重ねにより将来、全領域にわたり差異が認められるか、性差をも含め1部が除かれるかは、現時点では明らかでない。

さらに、進路に関する調査のなかの進路成熟尺度は、男女とも明確群が高く、職業に関する状況尺度の3つの下位尺度も、すなわち、自己確立は明確群が大、職業情報はその必要度が少ないのが明確群の方に、実現への障害も明確群がより小さいことが明らかになった。

要 約

高等学校1年生を対象に、進路発達状況について、3つの視点から検討を加えたが、以下のようによまとめることができる。

1. 1年生2学期時点での進路意識の実態は、卒業後の進路について、決めていないが約1/5程度という実態である。また、志望職業は男子が26%、女子が32%と、決めているのは女子の方がやや多くみられた。

さらに、職業選択決定状況も男子が未決消極型に入る猶子に、女子は未決積極型の混乱の状況に特徴をみることができた。

2. 進路の成熟について、いかなる要因がかかわるかを数量化による処理でみたところ、進路成熟は、職業選択決定状況が既決にあるものが多く、興味・関心事も将来的に不変、職業に対する理解が十分なこと、志望職業が絞られ定まっている、自己の長所・短所が十分に理解できていること及び職業観の確立が図られていることなどが成熟の影響要因として明らかになった。

3. 進路意識の明確群と不明確群が、果たしてSDSによる職業志向性との間に違いがあるかを検討したところ、明確群の志望職業にみる特定の職業のSDS総合コードには、当該職業を表す独自の結果がみいだされた。

職業行動に関する研究

また、SDS 総合得点結果にも違いがみられ、明確群が領域により、得点が高く認められた。さらに、職業に対する自己確立、職業情報及び実現への障害からなる職業に関する状況尺度においても、明確群と不明確群の差異があることが明らかになった。

本研究は、高校1年生の2学期の一時点だけの極めて限られたデータを取り扱ったが、研究の最終目的は、進路発達の状況が学年進行のなかでどう展開されていくかである。そのため、今後彼らの卒業後の動向を捉えることも計画している。これら一連のデータから、発達途上にある青年の選択から適応行動のメカニズムが明らかになることが期待される。

Appendix

進路に関する調査

進路決定に関して、現在のあなたの状態に最もよくあてはまるものを、各設問ごと 1つだけ 選び、その記号を ○印 でかこんでください。

また、記述が必要なところは、_____ の欄に書いてください。

〔1〕高校卒業後の進路について

- a 大学進学
- b 短期大学進学
- c 専門学校進学
- d 就職（家業も含む）し、進学する。
- e 就職（家業も含む）
- f 家庭でおけいごとや家事をする。
- g どうするか決めていない。
- h その他（ _____ ）

進学者のみ記入

〔2〕第1志望の学校、学部・専門の方向性について

- a 明確にきめている。 }
b 大体きめている。 }
- c ばくぜんとしている
- d まだ、何も考えていない。

志望校名

学部・科（専攻・コース）

志望理由

その場合、将来の職業と結びつけて志望校、専攻を決めましたか。

- a 十分考えて決定した。
- b 多少考えて決定した。
- c 全く考えずに決定した。

質問〔3〕以降、全員記入

〔3〕志望職業について、高校または上級学校卒業後の就きたい職業・仕事をあげてください。会社員や公務員などは、そこでのやりたい仕事内容 — 例えば、営業係、経理係、一般事務、窓口係のように一をくわしく書いてください。

職業行動に関する研究

- a 明確にきめている。 }
 - b 大体きめている。 }
- c ばくぜんとしている
- d まだ、何も考えていない。
- e 職業・仕事には就かない。

志望職業名
その職業・仕事を選んだ一番の理由を1つあげ、○印でかこんでください。
a 給料がよいから
b 親や家族がしてるから
c 興味があり、自分にあっているから
d 社会的に価値ある職業だから
e 将来性のある職業だから
f 先生、友だち、家族などがすすめたから
g 安定した職業であるから
h ただなんとなく
i その他 ()

〔4〕次に、職業の選択決定に関することがらがあげてあります。このうち、今のあなたの状態に一番近いものを1つ選び、○印でかこんでください。a～i にあてはまらない場合、j その他を選び、今の状態をくわしく書いてください。

- a 将来を真剣に考え、積極的に志望する職業の決定をはかっている。
- b なんの難しさも殆んどなく、迷わず志望する職業をきめている。
- c 就きたい希望の職業があり、なるべく実現できたらと思っている。
- d 取敢えず志望の職業はあげているが、いざ就職時にもう一度考えるつもりである。
- e いずれの職業・仕事に向いているか、出来るだけ早い時期に見つけだそうとしている。
- f 今は決めていなく、上級学校へ入ってから考えるつもりである。
- g 将来、何をすればよいかを迷っている状態である。
- h 将来については考えないで、なんとかなればと思っている。
- i 職業・仕事には就かないので、この設問には答えられない。
- j その他 ()

〔5〕以下にあげることごとについて、あなたにあてはまるならば、回答欄の「はい」を、逆にあてはまらないならば「いいえ」のいずれかを、○印でかこんで下さい。
 なお、どうしても回答が出来ない場合は、空欄にしておいて下さい。

質 問 事 項	回 答 欄
1. 自分がとるべき、或いはとっている進路(学校・仕事)について、まちがっていないことを確かめたい。	はい いいえ
2. 自分の興味・関心事は、何年かたつと変わりそうである。	はい いいえ
3. 私には自分の思っている仕事、うまくやりこなせるかわからない。	はい いいえ
4. 自分の長所や短所が、具体的にどこにあるかわからない。	はい いいえ
5. 自分ができる仕事・職業から、頭にある求め望んでいる生活をするにはむずかしい。	はい いいえ
6. もし、今、仕事・職業を決めてしまうのであれば、私にはまちがった選択をする恐れがある。	はい いいえ
7. 自分がやるべき仕事・職業を見つける必要がある。	はい いいえ
8. 仕事や職業についてのしっかりした態度を作りあげるとは、自分にとって時間がかかり、また難しい問題である。	はい いいえ
9. 進路(学校や具体的職業)を決めるのに、今、混乱の状態にある。	はい いいえ
10. 今、具体的に選んでいる職業は、自分にとって正しいかどうかわからない。	はい いいえ

職業行動に関する研究

11. 世の中の人々が、どのような仕事や職業についているか十分理解していない。	はい いいえ
12. 自分の頭のなかにかぶ具体的な職業は、1つだけではない。	はい いいえ
13. 楽しい・やりがいのある仕事があるのか分からない。	はい いいえ
14. 自分として、将来めざそうとする具体的な職業をもっと数多く考えてみたい。	はい いいえ
15. 自分の能力や才能は固定してなく、年々変わっていきそうである。	はい いいえ
16. 自分の生き方、とるべき道が、どれほどあるかわからない。	はい いいえ
17. どんな仕事や職業が、長く続けられそうかわからない。	はい いいえ
18. 人それぞれがめざしている仕事・職業について、それをどのようにして実現するか、自分にはわからない。	はい いいえ

〔6〕 次の質問について、それがあなたにとって必要な情報、あるいはあてはまるならば「はい」を、不必要またはあてはまらない場合は「いいえ」のいずれかを○印でかこんで下さい。
 なお、どうしても回答が出来ない場合は、空欄にしておいて下さい。

質 問 事 項	回 答 欄
1. 仕事・職業の選び方についての情報	はい いいえ
2. 仕事や職業の可能性、機会についての情報	はい いいえ
3. 世の中の人々がどんな仕事や職業についているかの情報	はい いいえ
4. 将来の進路をとるのに必要な技術の修得や勉強方法についての情報	はい いいえ
5. めざそうとする進路をとるには、能力的に問題はない。	はい いいえ
6. 経済的には、自分が求めている進路を進むことができる。	はい いいえ
7. ぜひとりたい進路について、自分にはすぐれた力がありそうなので、それをとることは可能である。	はい いいえ
8. 親や先生などまわりの人たちは、あなたの進路（学校・仕事）をよく理解してくれている。	はい いいえ

文 献

- Blos, P. 1962 On Adolescence The Free Press.(野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Holland, J. L. 1973 Making Vocational Choices : a theory of careers Prentice-Hall.
- Holland, J. L. 1985 Making Vocational Choices : a theory of vocational personalities and environment 2nd Ed. Prentice-Hall.
- Holland, J. L., Paiger, D. C. & Power, P. G. 1980 My Vocational Situation Consulting Psychologists Press. 1980
- Holland, J. L., Paiger, D. C. & Power, P. G. 1980 My Vocational Situation : Description of an Experimental Diagnostic Form for the Selection of Vocational Assistance Consulting Psychologists Press.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度 — 大学生の職業経歴選択を中心に — 教育心理学研究 28, 67 - 71.
- 文部省 1984 1985 1986 1987 昭和58年度、同59年度、同60年度、同61年度 学校基本調査報告書(初等中等教育、専修学校・各種学校) 大蔵省印刷局
- 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版
- 森下高治 1984 職業行動に関する研究 — SDSテストと進路発達について — 日本心理学会 第48回大会発表論文集
- 森下高治 1985 職業行動に関する研究 — SDSテストと進路発達について② — 日本心理学会 第49回大会発表論文集
- 森下高治 1986 職業行動に関する研究 — SDSテストと進路発達について — 相愛大学研究論集 2, 59 - 72

- 森下高治 1987 青年の進路と生きがい (神戸忠夫編 青年心理学 第11章) ナカニシヤ出版
中西信男・竹内登規夫・那須光章 1980 進路発達調査 CDT-3 実務教育出版
下山晴彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての研究 教育心理学研究 31, 56-61.
武田正信・森下高治 1980 日文化SDS職業適性自己診断テスト 日本文化科学社

A Study of Vocational Behavior – some
problems on career development –

Takaharu MORISHITA

ABSTRACT

This study was undertaken to explore career development for high school students.

A total of 633 boys and 667 girls at 1st year level served as Ss. The Career Development test and the SDS test were administered in Oct. and Nov. of 1986.

Results were as follows:

1. About 25 % of the boys and 30 % of the girls had particular vocational aspirations. Girls were more decisive than the boys. Also some boys tended to deliberate in making decisions about vocational choices and girls were often confused about making such choices.

2. What factors influenced career maturation? To find some of these computer compilation by Hayashi I, II of Multiple Analysis was used. It was found that vocational aspiration, self-identification to vocational values, consistent interest and comprehension of oneself were major factors in career maturation.

3. Vocational Consciousness between the decisive group and the indecisive group were compared. The total code and profile in the SDS test showed unique characteristics in the decisive group. The decisive group scored higher in vocational identity, vocational information and vocational barrier scores.